雑俳

第9回

【内田百閒の俳句評】

八木　忠栄

内田百閒という人物が大好きだ。剽軽で気むずかしそうな老獪・百閒センセイ（と呼びたい）は俳句も書いた。そして言うまでもなく夏目漱石の門下だった。

欠伸して鳴る頬骨や秋の風

独り居の夢に尾もあり初枕

どこやら、おかしさが湧きあがってくる句である。

『百鬼園俳句帖』が好きで、ときどき読み返す。そのなかで、師漱石の俳句について「そう高く買っていない事は、明言し得る」と書く。それでいながら「肩に来て人なつかしや赤蜻蛉」を漱石句の「絶唱」としている。

また、友人芥川龍之介の俳句に対しては「あまりいいと思っていない」と書いている。とはいえ、「河童忌の夜風鳴りたる端居かな」など、芥川追悼句をいくつも詠んでいる。さらに「文壇人の俳句は、殆ど駄目だと云って差支えないであろう」とさえはっきり断言している。百閒センセイらしい独自性、愉快ではないか。

子規の「痰一斗糸瓜の水も間に合はず」でさえ、「何の事だか、丸で分からない」と評している。「分からないなりに、いい句であると思う」のだそうである。呵呵。

公益社団法人 俳人協会